

かくれキリシタン 潜伏キリシタンの信仰形態を守りつづける人々

「潜伏キリシタン」と「かくれキリシタン」

19世紀後半に、ほとんどの潜伏キリシタンがカトリックへと復歸しました。しかし、禁教中の潜伏期からの信仰対象や儀礼を貫き通す集団もありました（その一部は今なお存在しています）。これらの人々は、徳川幕府の時代の潜伏キリシタンと区別して、かくれキリシタンと称されています。ほかにも、禁教期にキリシタン信仰を黙認してくれた檀那寺等に帰依し、仏教や神道に改宗する人々もありました。

系統と組織

受け継がれてきたキリシタンの信仰組織や行事には地域ごとの特色がみられます。それらは平戸・生月系と、外海・五島・長崎系の二つの大きな系統に分類されています。

信仰組織には、宣教期に組織された「慈悲の組（ミゼリコルディア）」と「信心会（コンフラリア）」の二種類があります。これらの組織は（1）神聖な人像を守り、行事を執行する帳方またはオヤジ役、（2）洗礼を授ける水方またはオジ役、そして（3）行事の補佐や連絡・会計係を務める聞役または役中の三役によって統括されていました。

近年、社会の変化や高齢化等により、かくれキリシタンの信仰形態を守る共同体の数は急激に減少しています。かくれキリシタンの人口は、昭和（1926-1946）の初期には推定3万人以上とされていました。しかし、この人口は、1999年には約1,000～1,500人まで急落しました。信仰が存続している地域も縮小し、現在では生月島、外海地区、五島列島の一部のみとなっています。

祈りと信仰の対象

かくれキリシタンの行事の際、信徒は潜伏期を通じて口伝されてきた祈り「オラシヨ」を唱えます。宝物や納戸神などと称される御神体には、キリシタン時代から伝わる、または19世紀半ばに宣教師が再来した後に渡されたプラケットやメダイ、ロザリオなどがあります。外海・五島地方では代々マリア観音が受け継がれており、生月では御掛け絵と呼ばれる聖画等が継承されています。

図1

「かくれキリシタン」の儀式

1904～1905年頃

「史料写真集 生月」渡辺庫輔収集

（長崎歴史文化博物館）

図2

生月島と平戸島との間に位置する中江ノ島は聖地です。1622年と1624年に複数のジュワンという洗礼名を持った殉教者が処刑された場所。御魂が宿っており霊力があるされるこの島から採れる御水は「サンジュワン様の御水」と称される。

1904～1905年頃

「史料写真集 生月」渡辺庫輔収集

（長崎歴史文化博物館）

図3

バスチャンの師と考えられているサン・ジワン（St. John）は外海の枯松神社に祀られている。付近にはキリシタン墓地と禁教期にキリシタンがオラショを記憶した場所である「祈りの岩」と呼ばれる大岩がある。